

【巻頭言】

放射線の安全について思うこと

理事(編集委員長) 宮本 要一(49回生)

東日本大震災は自然災害だけでなく、大きな人災の引き金になった。日本では起こり得ないはずの重大な事故が起きてしまった。日本人が自らの手で引き起こした被曝事故である。事故後の政府の対応は、国民の不安を一層助長した。

原子炉からまき散らされた放射性物質は、原発周辺地域にとどまらず三陸、北関東にも際限なく降り注ぎ、ありとあらゆる物を汚染した。震災から5ヶ月経った今判ることは、政府は公表をためらっていたこと。対応の遅れが被害を拡大したこと。そして有効な対応策は未だに打てず放射能汚染は拡大していることである。

半世紀に亘り原子力行政が築いてきた「原発安全神話」は崩壊し、反原発の声が再び多く聞かれるようになってきている。今更言うまでもないが元々原発には推進派と反対派があり、推進派は現在の技術で管理すれば安全であるとし、反対派は十分な管理は不可能だから使うべきではないとしてきた。当然、行政は推進派の立場で安全管理を徹底することを前提に建設を進めてきた。日本の安全基準や管理は世界の手本とまで言われていた。しかし残念なことにそこに落とし穴があったのではないだろうか。「起こしてはならないこと」への安全対策を進めるため、嚴重に、幾重もの対策を重ねていく内に、いつの間にか「起こらないこと」のように思い込んでいくのではないか。それが想定外という言葉になるのではないだろうか。

放射線を扱う我々も、ここに学ぶべき点があると思う。現在の医療の発達には、放射線の利用なくしては考えられない。それを被曝から守るために捨てると言うつもりは毛頭ない。発見当初から放射線は人体に害を与えることを承知の上で、それでも利用するために様々な工夫を凝らしてきた。線量低減を目指し装置や周辺機器の開発、改良を行ってきた。小生も一般撮影に従事していた頃は撮影条件の工夫、防護用具やフィルターの作製、撮影部位の制限などに取り組み、被曝線量低減を目指していた。しかし放射線治療に携わってから考え方が変わった。放射線は細胞を殺す力を持ったものである。それを扱うにはより厳密な取り扱いをしなければならない。安易に使ってはいけないものという意識である。その視点から振り返れば、それまでは、放射線を使うことを前提にした考え方であったと思う。少しなら大丈夫だから、一回なら大丈夫だから、これ位なら安全だから、心配ないからと言ってきた。しかし本当にそれでいいのだろうか。少量なら使ってもいいとすれば、そのためにこんなに工夫している、だから大丈夫だと言う論法は、先に示したように何時か緩んでいく。気付かない内に平気で使うようになってしまう。それが人の常である。放射線は少量なら使ってもよしとして向き合うのか、使ってはいけない物を使っているという認識で向き合うのか。ここには大きな相違がある。考え方が導く結果の大きな分かれ目になると思う。

あなたは放射線をどちらに置いていますか？どちらに置いて仕事をしていますか？

閾値というあいまいな値の解釈を議論しながら、人体に有益であるとする結論が得られていない放射線を扱う以上、他に勝る有効な手段がないが故に使わねばならないならば、その認識を強く持つべきではないか。放射線を扱う我々がそれを強く意識し、より安全を目指す。放射線を人体に照



射することを許された唯一の国家資格を持つ我々に与えられた使命であると思う。

大震災が引き起こした福島原発の事故、思いもかけぬ事態が次々と報道されたが、政府の「安全です」と言う説明に首を傾げた学友は多数居られたと思う。そして強制避難と風評被害。子ども達への影響を心配し、自費で購入した測定器を手に通学路を彷徨う親御さん。自然放射能同等の値にも眉を曇らせている姿が報道されている。今くらい人々が放射線に対する不安、不信を強く持っている時はないのではないだろうか。無用な心配や過剰な不安を与えぬよう対応していくのも専門職である我々の責務であると思う。

放射線の安全と、その使用に必要な情報の公開と明確な説明。そしてそれに向き合う我々の認識を今一度、問い直す機会であると思う。

以上

* 通巻 201 号 2011 年 10 月 10 日発行(H23-No.3)より